# ボランティアは"心の張り"ですね

被災者で満員の避難所（長田区で）

――当時から続けている支援活動はありますか。

**細野**　ボラセンの組織と運営の仕組みを作りました。同時に立ち上げた「子どもと遊ぼう」は、「子ども文化」に改称して、双方とも現在に引き継がれています。

**後藤**　人形劇や老人施設のボランティアに長年関わってきましたが、現在も続いているのは昔あそびの会だけとなりました。

**宮城**　メンバーの入れ替わりはあるけど地域の高齢独居者訪問、障害者施設の慰問は続けています。

**飯井**　当時から、出来ることがあれば参加するといった状態でした。継続しているものはありませんが、その時々に応じ出来ることをやっています。

## 当時の体験を生かして

――ボラ活動を通じて思ったこと、感じたことは。

**宮城**　震災をきっかけに始めたボランティア活動ですが、人との関係も広がり今ではボランティアが心の張りとなっています。

**後藤**　活動を通して良い経験が積めたと思っています。「ボランティアができるということは自分にとって喜びですね」。

**飯井**　ボランティアは、まず「私もやってみよう」と勇気を出すことではないでしょうか。

**細野**　「再び学んで…」を志す意思さえあれば、ボラ活動の有無にかかわらず〈わ〉のメンバーであり続けるべきだ、というのが私の信条です。

――当時の活動は今の生活（人生）に、どんな影響を与えていますか

**後藤**　カレッジで学んだこと、呼びかけに応じて活動に参加したことで、様々な経験を積み、たくさんの友達ができました。老後の生活に充実感を感じています。

**細野**　私も同じくカレッジで学んだこと、震災に遭遇したこと、この2つは重要なポイントです。もしこの2つがなかったら、全く異なる人生を歩んでいたと思います。

**飯井**　生かされたことへの感謝と、生きたかった人への鎮魂を込めて毎年、1月17日には東公園の記帳所で、「命」と書いています。

**宮城**　様々な経験が役に立っています。折々に感謝できることや、他人の苦労が少しは分かる人間になれたかな…と思っています。

――3年前からグループ〈わ〉がおこなっている東北支援活動について、感想を。

**飯井**　受け入れ側が、どこまで望んでいるのか、冷静に見極めることも大切です。現地に行かなくても、繋がりを持った地域への支援を忘れることなく、形を変えて続けていけば良いと思います。

**細野**　できることを、できるだけする、という

仮設で餅つきをする宮城さん㊥

のがボランティアの基本なので、今の東北支援のやり方でいいですよ。

**宮城**　行きたい気持ちはありますが、体力に自信がないので、日赤や区会などを通じて募金を続けています。支援活動に参加している方に感謝です。

――貴重なお話をありがとうございました。

**●座談会を終えて**　　ガレキの町で、先輩たちは「できる奉仕」を果敢に、懸命に実践しました。それが原動力となって、ボランティアセンターやグループ〈わ〉が生まれたのです。私たちは、先輩たちの思いを共有し、しっかり引き継いでいるのだろうか――。体験談に感動しながら、そんなことを考えさせられた座談会でした。

【文中に掲載の写真は卒業生からの提供です】

◆細野恵久さんは、2期生として入学しましたが、98年4月から1年間休学、99年4月3期生として復学しました。